と記され、而してこゝに只室韋と曰ふは、烏介が「託付之」と記さるゝより考ふれば、黑車子室韋の義なるべきは甚明かなれば、可汗の之に依るに至りたるは、室韋の此の部が當時尚回鶻に從ひ、而して特に其の間に姻戚の關係の存したるに由りたるものと見ざる可らず。

今茲に回鶻と室韋との關係を敍したるに因み、更に奚及び契丹と回鶻との關係の如何なりしかに論及するを便なりとす。前に記したるが如く至德年間磨延啜の時代には、此等の兩部は回鶻に附したるものと思はるゝが、其の後の有樣に就きては、之を明かにすべき史料の存するを知らず、然るに舊唐書張仲武傳に、忠武が回鶻の特勤那頡啜を破りたることを記したる續きに

先是奚契丹皆有廻鶻監護使、督以歲貢、且爲漢諜、至是遣裨將石公緒等諭意、兩部凡戮八百餘人

と記し、新唐書同傳も亦之に從へり、那頡啜の敗戰は略ぼ會昌元年末の事なるべきは前述の如くなれば、回鶻が奚契丹を覊屬せしめ、其の國に監護使を置きたるは、本文に「先是」とあるによりて知り得るが如く、此の年以前よりの情態なりしこと疑無し、思ふに至德以來兩者の關係は、時によりて變じたる可きは疑無けれど、當時回鶻の勢衰運に陷るに及びても、尚かゝる情態を有したりしより考ふれば、大體に於て至德以後も此等の兩部は引續き回鶻の勢力の下に在りしものと見て大過無かるべきこと、恰も室韋の場合に於ると同一なりとす。

回鶻と契丹との此の關係は翌會昌二年九月、契丹王屈戌が回鶻に背きて唐に降りしに至る迄繼續したるものにして、新唐書契丹傳に

會昌二年〔二三〕、回鶻破、契丹酋屈戌始復內附、拜雲麾將軍守右武衞將軍、於是幽州節度使張仲武、爲易回鶻所與舊